

地域連携で進めるササユリ保全活動の歩み

東 和之

阿南工業高等専門学校

1. はじめに

生物多様性の第2の危機には「自然に対する働きかけの縮小」が挙げられている。ここでは、対象地域の自然的・社会的特性に応じた、より効果的な保全・管理手法の検討を行うとともに、地域住民以外の多様な主体の連携による保全活用の仕組みづくりを進めていく必要があるとされている。

徳島県阿南市の伊島は、生物多様性が高く、阿南市生物多様性ホットスポット（阿南市 2014）、および重要里地里山（環境省 2015）に指定されており、徳島県内の数少ないササユリ *Lilium japonicum*（図1）の自生地として知られている。ササユリは日本にだけ自生するユリで、中部以西の里山環境に分布している。しかし分布域の多くで個体数が減少しており、四国4県全てにおいて絶滅危惧種に指定されている。伊島でもササユリは減少傾向であり、伊島中学校が主体となって、1983年からササユリの保護活動が行われていた。しかし、その中学校も2022年3月に休校となり、ササユリ保全の活動の継続が難しくなっている。さらに伊島では少子高齢化と過疎化が進行している。2021年時点で島民人口134名であり、この15年で人口が33%減少しており²⁾、地域活力の低下が懸念されている。

そこで本発表では、過疎が進む離島伊島において、生物多様性第2の危機である「自然に対する働きかけの縮小」の解決を目指し、ササユリの保全活動をテーマとして、島外から持続的に保全活動を支えるしくみの構築を目的とした。

2. 地域課題の抽出

阿南市と阿南高専が中心となり、ササユリの保全と持続的活用および伊島の活性化を目的として、島民や市民に呼びかけ2015年末に「伊島ささゆり保全の会」を設立した。その後、伊島ささゆり保全の会総会においてブレインストーミング法による意見抽出が行われた。ここでは現状の伊島が抱える問題点や、保全の会の活動を通してやってみたいことなどについて意見を抽出した。その結果、以下に示す3つの課題が抽出され、これらの課題の解決に向けた活動を実施していくこととなった。

課題1：ササユリの減少、課題2：ササユリについての知識不足、課題3：人の減少

3. 課題解決に向けた活動

3-1 ササユリの減少

ササユリの減少に対しての活動として、「1. 生息適地の調査」、「2. ササユリの育苗」および「3. ササユリ生息地の拡大」を行ってきた。

生息適地の調査については、徳島大学生態系管理工学研究室（鎌田研）の協力を受け実施した。その結果、



図1 ササユリ *Lilium japonicum*

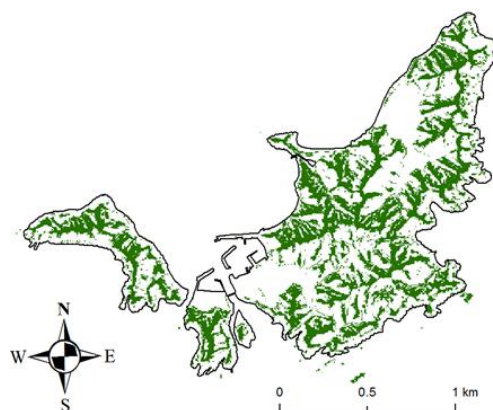


図2 ササユリ生息適地ポテンシャルマップ

ササユリが育ちやすいポテンシャルを持った地点の GIS マッピングを行うことができた(図2)。また、ササユリの生息に適した開空度(上空の透かし具合)も明らかにし、その値は15~25%であった。

育苗については、伊島婦人会を中心として種子からの育苗が実施されている(図3)。試行錯誤を繰り返しながら、育苗方法の確立に向けて活動中である。また、生息地の外で飼育した個体を野生に戻すためには様々な課題があることが指摘³⁾されており、育苗したササユリの取り扱いについても議論を始めている。



図3 育苗活動の様子

ササユリ生息地の拡大には、「徳島県森林づくりリーダーの会」の協力のもと、チェーンソーを使った伐採を行っている。上記の研究結果を踏まえての生息地拡大に取り組んでいる。

3-2 ササユリについての知識不足

ササユリの保全活動を行っていくにあたり、島民からササユリの知識不足に関して不安の声が多く寄せられた。そこで、元奈良県農業総合センター所長の荒井先生を招聘し、勉強会を実施した。伊島の現状も見て頂き、育苗方法や保全のための対処法などを学んだ。



図4 ボランティア後の集合写真

3-3 人の減少

高齢化の進む伊島において、保全活動を島民の方のみで行う事は非常に困難である。そこで保全の会では、ボランティアの受け入れのしくみづくりと活動のための外部資金の受け入れを行っている。また、伊島のファンを増やすための広報として「いいしま新聞」を発行している。

ボランティアは11月の下草狩りの時期に2回受け入れている。ボランティアのおかげで、非常に広範囲での下草狩りが実施できている(図4)。

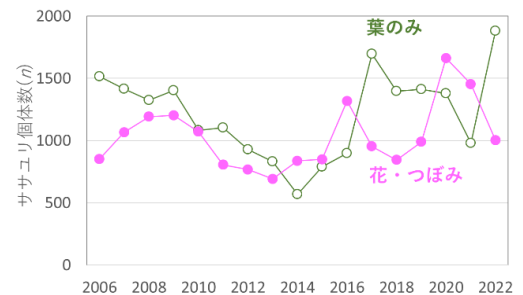


図5 ササユリ個体数の経年変化

ボランティアの受け入れ等の活動には資金が必要である。保全の会では、「日垂ふるさと振興財団 自然環境の保全活動」および企業・団体等から毎年70万円程の助成・寄付を頂いている。

4. 保全活動の成果と今後の課題

これら保全活動の結果、ササユリの個体数は保全の会設立前の2015年には1,637個体であったのに対し、2022年の調査では2,883個体に増加した(図5)。個体数増加の要因の全てを我々の活動に帰属することはできないが、地道な活動が実をつけ始めたのではないかと考えている。さらに、2018年には伊島ささゆり保全の会の活動が「国連生物多様性の10年日本委員会」による認定連携事業に認められ、加えて地元企業による支援(寄附・参加)で活動が支えられているなど、本活動は対外的にも評価は高い。しかし、伊島を支えるしくみづくりの構築は道半ばであり、今後も保全の会の活動を通して働きかけを行っていく必要がある。

参考文献

- 1) 環境省：生物多様性国家戦略 2010-2020, 2012.
- 2) 阿南市：令和3年版 阿南市統計書, 2022.
- 3) 環境省：絶滅のおそれのある野生動植物種の生息域外保全に関する基本方針, 2009.